

彙報

第二七回野尻湖クリルタイ

北川 誠一

アルタイ学あるいは、広く北アジア、中央アジアを対象とする研究者と学生の集会である野尻湖クリルタイは、第二七回が一九九〇年七月一五日から、一八日までの四日間開催された。会場は野尻湖ホテル、参加者は以下の四五人であった。

荒川正晴（早稲田大）、石橋崇雄（国士館大）、板橋義三（九大言語文化部）、一宮尚美（東京女子大）、井出口大作（関西大）、梅村坦（立正大）、宇野伸浩（早稲田大）、海老沢哲雄（埼玉大）、王禹浪（亜細亜大）、太田敬子（学振特別研究員）、大原良通（関西大）、小沢重男（東京外大）、小谷仲男（富山大）、片山章雄（東海大）、河内良弘（京大）、神田信夫（明大）、菊池俊彦（北大）、岸田文隆（京大）、北川誠一（弘前大）、北村高（龍谷大）、黒岩高（京大）、近藤真美（京大）、後藤明（東大東文研）、後藤智子

（日大）、佐藤次高（東大）、佐藤道郎（岩手大）、塩谷茂樹（京大）、清水宏祐（東京外大）、周清澍（内蒙古大、東洋文庫）、菅原純（青山学院大）、菅原睦（京大）、田中亜紀子（早稲田大）、谷口純一（京大）、田村建一（藤田学園）、東城敏毅（大阪外大）、橋本勝（大阪外大）、濱松純司（東大）、原山煌（桃山学院大）、林俊雄（古代オリエント博）、樋口康一（愛媛大）、細谷良夫（東北学院大）、堀直（甲南大）、堀川徹（京都外大）、松村潤（日大）、森川哲雄（九大）。

荒川は、トルファン出土史料を研究、二年前から、出土文物研究会を開き、毎月二回会報を発行。

石橋は、昨年、今年と中国東北調査に参加。『清史研究』第四号は、昨年九月刊行。最近では、袁崇煥學術討論会、清入関前の諸問題に関する學術討論会等に出席、『六部成語』索引の作業を続ける。

板橋は、韓国語、琉球語と比較して、日本語の格、接尾語などを研究。

一宮は、修士二年、新疆史について修論と取り組み中。梅村は立正大学、新疆大学のタクラマカン、ウルグムズタール合同調査に参加。個人的には、アルタイ地方を旅行。新疆ウイグルについて時代的、内容的に多様なアプローチを行う。

井出口は、学部三年、中国少数民族、歴史上では特に匈奴に興味を持つ。

宇野は、昨年は、元代のムスリム商人、今年は駅伝制について執筆、昨年は Junior Mongolists' Summer School に出席、ウランバートル現地の歴史研究者には、ペルシア語史料を読む人がいないようである。

海老沢は、数年まえより続けて読んでいたラテン語史料を、『クロニカ・マヨラ』に進めた。モンゴルと西欧の交流について執筆。

王は、黒龍江省社会科学院の研究員で、一九七八年から八六年にかけて、考古学調査に従事、また「女真」に関するフォークローアを採集、自身が半分は女真の血を引いていると紹介する。

太田の専攻は、九一―一三世紀の北シリア史、修論はアレップ市史、最近北シリアとジャズイールのムスリムと非ムスリムの関係に興味を持つ。一昨年从去年にかけてシリアに滞在。

大原は、修士課程一年、卒論は唐吐蕃関係史を扱う。

小沢は二〇数年ぶりの参加。退官後は悠々自適。目下、モンゴル語文法を執筆中。特に『元朝秘史』の言語は、材料もそろい半年もあれば脱稿する。他には、日本語系統論、契丹小字に取り組む。八月の「元朝秘史七五〇周

年記念学会」には、日本語で発表。

小谷は、昨年「ガンダーラシンポジウム」(日本バキスタン協会)に出席、その後ラーニガットに三回目の発掘調査、無数の資料のなから千二百点を選んで写真撮影、整理。その中の貨幣四〇点は年代決定の重要な資料である。八月はユネスコ・シルクロード調査の為、ウルムチ訪問、現地のシンポジウムに出席の予定。

片山は、突厥碑文研究会をもつ(古代オリエント博の林、早稲田の内藤、松崎ら)。白馬合宿の東京側主催者。山川出版『中央ユーラシアの世界』の索引等をつくる。

河内は、昨年、遼寧、吉林、黒龍江を単独で旅行。特に、遼寧で建州女直の本拠をみる。檔案学の鞠徳源氏を迎え、共同研究を実施。目下、中国から満州語専門家を招聘しようとしているが、法務省が調査期間を置くので、許可待ちである。天聰、崇徳滿文檔案の翻訳中。

神田は、昨年の東北三省では、疲労困憊。東洋文庫の清代史研究会メンバーでは楠木(筑波大学院)氏がウルムチに滞在している。域外漢籍學術討論会には出席。山田、植村、羽田三先生の追悼文を書く。

菊池は、北海道開拓記念館とサハリンの相互共同発掘調査、北海道と黒龍江省の共同調査、札幌大学とユジノサハリンスク教育大学共同発掘、アイヌのマガダン博物館、ウ

ルチ族、ユカギール族訪問、大阪教育委員会職員のアムール流域発掘参加等を紹介。最近の研究テーマは、靺鞨である。

岸田は、満州語に関する朝鮮語史料を研究、ハングルに満州語口語の発音の差異が反映されていることを発表。昨年、五一—一月ソウル大学東亜文化研究所に所属（韓国国際交流協会による）、韓国アルタイ学会に所属。

北川は、時節がらソ連の民族問題に時間をとられている。九月から一年の予定で、グルジアに滞在。

北村は、四月から学部専任になる。

黒岩は清朝西北門宦制度、漢回の歴史を対比研究。卒論執筆中。

近藤は修士一年、一四—一五世紀のアレッポ地方史を研究。

後藤明は「イスラームの都市性」で忙殺される。昨年の国際シンポジウムの後、今秋の小シンポジウム、来春の文部省主催シンポジウムの計画中。従来の中東研究所構想に替えて、今年度調査費がついた「総合地域研究所」計画の書類作成に従事。昨年は、ヘブライ大学の「ジャーヒリヤからイスラーム」シンポジウムに出席、その後、トルコ、マグレブ調査。岩波『世界史の諸問題』第一巻責任編集。

後藤智子は、修士一年で中国中世史から清朝史に転じ、

満州語を始める。

佐藤次高は、「イスラームの都市性」国際会議に奔走、自身は「イスラーム都市の形成と展開」で中国、中東、東南アジアを巡る。イスラームの「ヤクザ」、「顔役」等出版、講演等の予定。

佐藤道郎は昨年九月盛岡で、アユルヴェーダ研究会の総会を行い、チベットからも医者と呼ぶ。モンゴルにもサンスクリット語の文献が多数あると思うので内容を知りたい。ミラルパについて研究中。

塩谷は、甘肅省、青海省の孤立したモンゴル人の音韻について研究中。語頭子音の軟音化、円唇中母音の発展、出動詞形成接辞について発表。

清水は「イスラームの都市性」E班で、トルコからマグレブにかけて調査。また、東洋文庫『トルコ語アラビア語新収速報』作成、都市の比較研究（ニシャプール、バグダード）に従事。

周は、モンゴル史を古代より近代まで研究。主たる仕事は、『中国大百科事典』中国歴史の「元史」分冊、中華書局版の評点本『元史』校訂等である。

菅原純は修士課程二年で、論文のテーマは「ヤクープ・ベクの反乱前史」、新疆聖者廟に興味を持つ。

菅原陸は、大学院博士課程後期で、トルコ諸言語、特に

チャガタイ語とオスマン語の地方差、時代差の研究。

田中は、学部一年生。

谷口は博士後期課程、シリアのアレッポの都市史研究。目下、京都外大のアラビア語写本整理。

田村は、元来ドイツ語が専門、四年まえより、満州語研究に転ずる。対格「de」による限定目的と非限定目的について、『満文金瓶梅』に拠って研究。起源はモンゴル語からの借用であると考える。

東城はモンゴル語科学部三年生、契丹文字の解読、遊牧国家と征服王朝の比較に興味。

橋本は日本語とアルタイ語、日本語と韓国語の関係について執筆。八月の「元朝秘史七五〇周年記念学会」に出席。学内コミュニティ・センター委員として座談会等を主催、『AV Journal』を発刊。

濱松は、学部二年、先輩に中央アジア史研究を強く勧められている。

原山は、この四月より現職。大阪府と提携の大学主催講演会で講演を纏め出版。『元朝秘史』書評、「モンゴルの犬」等の仕事をする。

林は、シルクロード関係翻訳、山田信夫『北アジア遊牧民族史研究』書評、中央アジア民族史概説など執筆。鹿石関係研究会（國學院川又、東博高濱、早稲田藤川）で文献

を読み、ワープロで『草原考古学研究』を発刊。なお、江上館長は、春は、ジンギスカンの墓探し、クリルタイ会期中は、ピアククのため東欧、その後、また北朝鮮訪問。館の行事は、エジプト展、南京展の予定。

樋口は、昨年A A研、岡田英弘教授のプロジェクトで、モンゴル語仏典の言語を分析。京大ではアルタイ語の専門家が次々とでているが、四国ではネイティブ・スピーカー一つにしても、専門家養成の条件にないことを痛感する。

細谷は、昨年は黒龍江省東半、今年はその西半分の調査の準備と整理に忙殺。ドルゴンの写真など啓蒙書に発表多数。夜のスライドは松花江を下り、東京城、興凱湖にはいるルートを映写。

堀は、この夏清水、梅村、小松久男、私市正年、設楽国広、真田安と共に「イスラームの都市性」で、新疆諸都市カシユガル、ヤルカンド、ホタンで街区調査、八月四日からはウルムチ国際カレーズ学会に出席の予定。羽田記念館では年二回の乾燥アジア談話会がもたれている。民博では、松原が、ユルドウスの調査（「遊牧の歴史と現在」）を計画中。

堀川は、八七年度科学研究費調査（「中東の都市景観」）で、報告書を刊行。学内研究会の『マレ・ノストルム』も第二号を出す。イスラム写本研究会を主催、昨年度分は京

都外大「ヒブリオテカ」一、二で公開。同大アラビア写本も京大の谷口が整理中。昨年に続き、八月は再び、トルコ調査。昨年は、バシユバカンルク文書館で中央アジア関係史料を採す。

松村は、数年ぶりの出席。「しにか」に白鳥庫吉の学問について書く。一九八七年、一九八九年の中国東北史跡調査に参加。

森川は九大農学部と新疆師範大の協定による調査で、新疆に七月二五日から八月一日迄、ウルムチ近くの遊牧地域調査を予定。岡崎敬教授の計報について述べる。

七月一六日は、海外調査報告が、松村潤「中国東北地域」佐藤次高「ジャカルタ・寧夏・チュニス」、細谷良夫「黒龍江省の遺跡」の三本。研究報告は、岸田文隆「三訳総会」の満文について、王禹浪「女真伝説をめぐって」の二本。

松村報告は、東洋文庫清代史研究室が中心になって行っている中国東北地方の史跡調査の報告。第一回は、「修復」が急速に進められている現状に鑑みて、緊急調査としておこなった。本調査初年度の一昨年は、黒龍江省、吉林省を中心に行った。ここでは、瀋陽から東へ、入関前の清の遺跡の調査概要を述べる。遼陽は、ヌルハチが一六二一年、

老城から遷都して遼陽城に入ったが、広すぎるので新たに東京城を築いた。そのわずか数年後瀋陽城を築く。瀋陽博物館には、碑文が保存されている。東京陵には、近親の遺骸が移されて墓廟が設けられた。撫順から蘇子河にいたる経路の途中にある明清交替の関ヶ原といわれるサルフ戦場はダムの建設で水没、城も登れなかった。木奇を経て、新賓滿族自治県に至り煙突山・永陵・老城・旧老城等を調査。万曆二十一年に申忠一が訪れている旧老城は、三重の城壁が設けられていたという。老城は、ヌルハチが万曆二十一年、旧老城より居を移した所で、万曆三十三年には、外城が築かれた。同四三年ここで八旗が制定された由緒ある場所である。

岸田発表は、康熙四二（西曆一七〇三）年に朝鮮司訳院で出版された満州語学習書『三訳総解』に関するもの。現伝の刊本は、乾隆三九（一七七四）年重刊本であるが、この書の中の満州語形は、清文鑑に見えるものとは違う。原本は順治七年刊「満文三國志」であると確信する。ただし、両者には少なからぬ異同が見られるが、その理由は、朝鮮で同書が編纂されたとき、底本が満文訳された際に原本とした漢文原典（嘉靖本）以外の漢文文献が参考にされたためであろう。その参考文献とは、「三國志演義」中の李卓吾本に類似の刊本である。なお、発表には大部のレジ

メが用意されていた。

王氏は、『女真伝奇』（千又彦、王禹浪、王宏剛共著、時代文芸社出版、一九八九年）の著者である。王氏は一九五六年、方正県に移住していた家庭に生まれる。文革時代は、昼は労働、夜は県内に伝わる伝説を聞く毎日であった。一九七八年にはハルビン市周辺の考古学調査の責任者となり、一九七九年から黒龍江省金城考古学調査に従事、この間多数のフォークローアを収集する。さて、王氏の野外調査方法には、四つのこつがある。「咀」、「眼」、「腿」、「手」だそうである。王氏の語る民俗学、考古学に関する話題は、広く、新鮮で興味深い、何より驚くべきは、満族のなかに完顔部の子孫だと考え、自己を女真だとアイデンティファイする人々がいるということであろう。

佐藤報告は、『イスラーム都市社会の形成と変容に関する比較研究』国際学術調査のためジャカルタ（一九八九年）、寧夏（一九九〇年）、チュニス（一九八九年）を調査し、街区、礼拝堂等の比較をおこなった際の一部の報告。寧夏回族の宗教活動の活発さが印象に残った。

細谷報告は、夜のスライドのみであったが、ここ数年の黒龍江調査を判り易く説明した。松村発表を補助する報告でもあった。

一七日は、研究報告が、小沢重男「元朝秘史の言語」、

周清澍「内蒙古大学蒙古史研究所概況」、菅原睦「新出カイロ本アリー・スィール・ナヴァーイー『鳥の言葉』について」の三本、海外調査報告は、太田敬子「シリアにおける文書保存について——アサド図書館を中心とした写本保存の説明」、清水宏祐「マラーズギルト再訪記」、林俊雄「ユネスコ・シルクロード第二次予備調査」、梅村坦「西域南道・アルタイ」の四本。

小沢発表は、先ず、「原形『元朝秘史』」が記された文字は何であつたかに関する学説史を述べた上で、ウイグル文字から漢字に音訳されたという自説を述べ、その上で、「元朝秘史の言語」を、(1)音韻上、(2)形態素上、(3)統語上、及び(4)語彙上の特徴から多角的に分析を加えていった。その結論は、(C)B、E、(C)Eの特徴をもつ中世モンゴル語東部方言である。

アリー・スィール・ナヴァーイーは、チムール朝の文人宰相で、チャガタイ語で幾つもの作品を残したが、『鳥の言葉』は神秘主義の教典である。菅原発表の「カイロ写本」というのは、カイロで購入された写本というだけの意味で、現在の所有者は、神戸市の外国語大学である。発表は用意されたレジメに添っておこなわれ、同写本の言葉は、母音表記はオスマンの、音韻形態はチャガタイ的である等、オスマン語とチャガタイ語の両方の特徴をもっている。

る事が、例証された。

周発表は、用意された中文レジメを読み上げて、その場で、邦訳したものであった。内蒙古大学蒙古史研究所の沿革と、個々の所員の専門分野と業績について手短にまとめられた。

太田報告は、シリアのダマスクスとアレップの主要古文書館、図書館の所蔵写本と図書の内容に関して簡単なコメントを述べた後で、アサド図書館で受講した写本の保護と保存講習会の内容を紹介するものだった。アサド図書館ではこの講習会受講者に写本校訂の許可を与えるということである。

マラーズギルトは、一〇七一年、セルジューク朝とビザンツ帝国の間で天下分け目の決戦が行われたところである。清水報告は、昨年八月トルコを訪れ、史跡としての同市の現状、交通網、周辺農村との関係を、一九七六年との対比で述べたものであった。

林報告は、昨年九月一三日から、十一月一日に及ぶエネスコ、シルクロード調査の西半分の部分のスライドによる報告であった。初めてスライドでみるものも多く含まれていた。

梅村報告は、昨年の合同調査とその際個人的に行ったアルタイ旅行のスライドによる報告である。

今年のクリルタイは、若手も多く参加し、発表、報告の双方、質量とも多彩であった。研究者の海外渡航が多いのは、全般的傾向であるが、近年クリルタイも海外調査関係の報告が非常に多い。どれも貴重な情報であるので、呼びかけ人と事務局では何らかの形でこれらの情報をまとめたかと考えている。当面は、平成二年度文部省科学研究費の総合（B）の計画に一部分を乗せる予定である。